

『江帥集』前半部について

―登場人物と詠作年次等の考察(2)―

高野瀬 恵子

『江帥集』は、平安後期に活躍した儒者官人であり、歌人でもあった大江匡房(一〇四一―一一一一)の家集である。伝本は、冷泉家時雨亭文庫蔵本と、その転写本である書陵部蔵本の二本のみ。総歌数は五二三首。その七割余(三七四番まで)の部分は自撰によると見られるが、三七五番歌以降は匡房没後に身近な人物の手で増補された部分と考えられる(1)。筆者は、一昨年からの家集の読解に取り組み、まずは集中に登場する人物と、その関連から歌の詠作年次の考証を進めて来ている。初めに、女性を中心に後半部の登場人物と詠作年次について検討し(2)、ついで前半部の検討にうつり、前稿(3)では天皇・院・東宮・中宮ら皇族、及び摂関家の人物について整理した。本稿ではこれらに続き、前半部に見える廷臣らについて整理・検討したものである。

以下、冷泉家本を底本として(4)、人物の登場順に、人名(原文の表現を示す)と歌、その考証等を示す。人名には通し番号を付し、集の本文には、適宜、句読点、濁点、送り仮名等を施すとともに、一部は漢字を当てた。また、他集を調査・引用する場合は、勅撰集については『新編国歌大観』により、私家集については『新編 私家集大成(CD)』による。

1、まさながの朝臣(源政長)

まさながの朝臣、八条にて、かきねの梅

ふる雪のこころこそすれ梅の花かきねはしもにきえぬなり
けり (一四)

政長朝臣八条長歌、尋可書、冬夜長歌、筑紫にて

冬になり よもの草木も かれはてて あまのはらさへ
さえわたり 空かきくもり ふる雪の とけむごもなく
つもりつつ かまどの山の やまもりは ゆくへもみえず
みごもりて つま木こりたく 朝夕の けぶりのみこそ
立ちてけれ むぐらさしたる 草のいほに 軒のたるひに
とぢられて まばらにあめる 柴の戸は あけん年をや
たえず待つらん (三二三)

源政長(一〇三八―九七)は、宇多源氏、従二位参議資通男。源家流の神楽・郢曲を継承、子に伝えた。笛・和琴・琵琶の名手として知られ、堀河天皇の郢曲と笛の師をつとめた。康平四(一〇六一)年頃に任左少将、同七年に民部権大輔に転じ、以後内蔵頭、刑部卿を歴任、極位は正四位下。

一四番歌は政長の八条邸での歌会の折の作と考えられるが、同時詠らしき歌は見出せない。一方、三二三番歌の詞書にいう「政長朝臣八条長歌」では、他に源経信(経信集・一七六、新拾遺・一八八一)・源俊頼(散木奇歌集・一四一一、新勅撰・一三四〇)の二人の作が見出せる。『経信集』一七六番詞書によると「初冬述懐 永保二年十月日刑部卿政長八条会」(5)とあるので、長歌の歌会は永保二(一〇八二)年十月のことと考えられる。しかし、匡房の三二三番は詞書末尾に「筑紫にて」

とあり、筑紫で詠まれたものとすれば、その詠作年次は匡房が大宰権帥として下向していた承徳二（一〇九八）年、康和三（一一〇一）年の間の冬となる。そこで、三十三番歌は、永保二年の経信、俊頼との同時詠なのか、それとも十五年以上も後の筑紫における作なのか、という問題が生じる。実は、匡房が大宰権帥に任じられた永長二（一〇九七）年は、閏正月四日に政長が卒去し、その二日後に経信が筑紫で薨去しており、匡房は三月に経信の後任となったのであった。こうした事実を踏まえると、かつて政長の八条邸で経信らと同席して長歌を詠んだことがあった（詞書中に「尋可書」とある）匡房が、政長と経信とが相次いで没した翌年に筑紫へ下向（九月）し、筑紫の地で昔日をしのんで長歌を詠んだ、それが三十三番歌ではないだろうか。長歌中に大宰府近郊の歌枕「かまど山」が詠まれており、筑紫での詠作を裏付けると考えられる。

2、これいへ（藤原伊家）

これいへが長樂寺にまかりて、ゆみいむ歌よむとてつかはす

あづさ弓はるのやまべのまとゐにも隔つるものは霞なりけり

（二〇）

藤原伊家（一〇四一〜八四）は、正四位下周防守公基男。母は藤原範永女。白河天皇の側近で、右中弁正五位下兼民部大輔備後介。「承保二（一〇七五）年九月内裏歌合」「承暦二（一〇七八）年四月二十八日内裏歌合」に出詠している。

東山の長樂寺は、平安前期から風光明媚の地として知られ、

このうたはつねひらの朝臣所来感也

（七八）

藤原経衡（一〇〇五頃〜一〇七八以後）は、参議有国の孫にあたり、中宮大進公業男。母は藤原敦信女。長元四（一〇三一）年に六位蔵人となり、同六（一〇三三）年には式部丞を兼ねるも、十二月に少将藤原資房と乱闘して殿上を追われた。その後天喜二（一〇五四）年頃筑前守・正五位下。『尊卑分脈』では大学頭、大和守とも注されているが、時期は確認できない。家集『経衡集』がある。また、散佚した『経衡十卷抄』を撰したという。「和歌六人党」の一員とされる。

「斎院」については、前稿既出。匡房が後三条・白河両天皇の近臣として歌壇で活躍し始めた時期は、後三条天皇大嘗会和歌を詠んだ儒者歌人の先輩・経衡の晩年期である。なお、当該歌は『統詞花集』に見える。

斎宮の野宮にて人人はぎの歌よみ侍りけるに

大蔵卿匡房

あきの野のはぎのにしきをきてみれば袖うちふらんみちだにもなし

（秋下 一二二〇）

5、みちむねの朝臣（藤原通宗）

みちむねの朝臣八条にて、たなばた

天の河まだはつ秋のみじかよをなどたなばたの契りそめけん

（七九）

藤原通宗（生年未詳〜一〇八四）は、太宰大貳経平男。母は高階成順女。周防、若狹等の国守を歴任、極位は正四位下。兄弟に『後拾遺集』撰者の通俊、子女に隆源阿闍梨や『大式集』

文人・歌人らが訪れては詩歌を詠じている。当該歌は伊家が長樂寺を訪れて歌会などを催し（「弓射む歌」）、匡房が洛中からそれを羨ましく思う気持ちを詠み送ったものであろう。承保・承暦の頃のことかと推察されるが、詳細は未詳。

3、経信（源経信）

庭の木、葉をむすぶ、院の位におはしますとき、三条内裏にてよめる、題者経信

庭のおもは月もらぬまでなりにけり梢に夏の日かずつもりて

（七六）

源経信（一〇一六〜九七）は、宇多源氏、民部卿道方男。後一条・後朱雀・後冷泉・堀河の四朝にわたり、諸事堪能な文人官僚として活躍した。極位極官は正二位大納言大宰権帥。『後拾遺集』期の歌壇の重鎮で、琵琶奏者としても知られた。帥大納言、桂大納言と称された。1の政長の項に既出。

当該歌は、応徳元（一〇八四）年四月十九日、三条内裏における歌会の作。前稿（『江帥集』前半部について―登場人物と詠作年次等の考察（1）―）（6）の白河院の項で解説。同時詠が『金葉集』夏・九六（院御製）、同・九七（経信）、に見える。この歌会の題者は初めは匡房であったが、院の命で経信に代えられた次第が『経信集』五七番歌詞書に詳しい。

4、つねひらの朝臣（藤原経衡）

斎院の野の宮

あきの野の萩の錦をきてみれば袖うちふらん道だにもなし

作者らがいる。承暦二（一〇八四）年四月「内裏後番歌合」に出詠したほか、延久四年（一〇七二）の「気多宮歌合」や身内を中心とした歌合等を催しており、永保三年（一〇八三）には「後三条院四宮侍所歌合」の判者を務めるなどした。なお、子女の『大式集』作者は、この集後半部の登場人物であり、前々稿（『江帥集』後半部に関する二、三の考察―『大式集』作者と匡房、三位殿と匡房―）において詳述。

当該歌は、通宗が八条の家で七夕に歌会を催した折の歌であるが、同時詠等を見出せず、詳細は未詳。『続古今』に入集。

七夕のこころを 前中納言匡房

あまのがはまだはつ秋のみじかよをなどたなばたのちぎりそめけん

（続古今・秋上 三二八）

6、しなのかみもろみつ（源師光）

関白殿の八月十五夜

故郷にこよひの月のかくしあらば錦をきでも帰るばかりぞ信濃守もろみつ、この歌をみて、感じておくる歌

三笠山みねつづき照る月かげにしられぬ谷の松もありけり

（九二〜三）

源師光（生年未詳〜一一〇〇か）は、清和源氏、頼光の孫にあたり、父は太皇太后宮（上東門院彰子）大進として奉仕した頼国。母は尾張守藤原中清女。姉妹の一人が関白師実の妾として家忠らの母となった。本名、国仲。後三条天皇代に六位蔵人、白河天皇の承保二（一〇七五）年九月「内裏歌合」に「六位蔵人左衛門尉」として出詠。承暦二（一〇七八）年頃〜永保二（一

○八二)年に相模守、永長元(一〇九六)年に任信濃守。『江帥集』は師光を最晩年の呼称で示している。漢詩をよくし、歌人としても『後拾遺集』『金葉集』に各一首入集。

当該歌は、関白殿の八月十五夜歌会に匡房が詠んだ九二番歌を見て、師光が感ずるところがあつて九三番歌を送つてきたというもの。師光(国仲)は後三条天皇代の六位藏人であつたが、同じ時に匡房は五位藏人をつとめていた関係もあつて、交流があつたのであろう。前稿では九二番歌詞書の「関白殿」を「現時点では未詳」としたが、師光の歌人としての活動時期と重ねて考察すると、関白は師実か師通のどちらかであらう。前稿に示したように、同時代の『摂津集』に師通家の「八月十五夜」歌会が見える点では師通の可能性が高いものの、『江帥集』では「関白」師実と、「内大臣・博陸」師通とは呼び分けがあるようにも見える。また、九三番歌で師光は沈淪を嘆いているようだが、それは相模守を終えてから信濃守になるまでの期間が長かつたためであらうか。

7、ためなかの朝臣(橘為仲)

ためなかの朝臣、終夜見月

秋のよの宵より月をながめてはあけゆく天の戸こそをしけれ
(九八)

橘為仲(生年未詳一〇八五)は、筑前守義通男。母は信濃守藤原萃直女。永承二(一〇四七)年六位藏人、同三年駿河權守、治暦二(一〇六六)年五位藏人左衛門權佐、延久元(一〇六九)く同四年越後守、承保二(一〇七五)く承暦四(一〇八

〇)年陸奥守を経て、太皇太后宮亮正四位下に至る。家集『為仲朝臣集』があり、風流に執した姿が『無名抄』等に説話として残る。後年、和歌六人党の一員と称されたという。

当該歌は、為仲のもとで「終夜見月」題を詠んだものか。『和歌一字抄』でこの題の歌は当該歌のみ。ただ、題詠として時代の近い歌に、

九月十三夜詠終夜見月

名に高きこよひの月にあくがれて露とおきみてあかしかねぬ
(在良集・一八)

があり、同時詠の可能性も無いではない。この『在良集』の二番歌として、承保三(一〇七六)年の「前右衛門佐経仲歌合」の歌が収められており、菅原在良は承保頃から和歌活動を行っていることが確かめられるのである。なお、菅原在良(一〇四三―一一二一)は、大学頭・文章博士菅原定義(孝標の子)男。文章博士、摂津守を経て、鳥羽院の侍読をつとめた。極位極官は従四位上式部大輔(死後に従三位を贈られた)。

8、よりつなの朝臣(源頼綱)

よりつなの朝臣、津の国に羽束山、為贈詠不能送、早卒故也

秋はつる羽束の山のさびしきに有明の月をたれとみるらん
秋はててねをなく虫の霜をおもみ蓬がそまの心ぼそさよ
(一一六く七七)

源頼綱(一〇二四又は一〇二五く九七)は清和源氏、太皇太后宮(上東門院彰子)大進頼国男、母は尾張守藤原中清女で、

と、『江帥集』に近い表現となっている。

9、基忠卿

基忠卿薨送之

花とみし人はほどなくちりにけりわがみも風をまつとしらなむ
かへし
(二七九)

春風にあかずちりぬる花よりも契りしことのはこそ忘れね
(二八〇)

藤原基忠(一〇五六く九八)は、従一位左大臣家忠男。母は藤原経輔女。関白師実の孫。承暦四(一〇八〇)年藏人頭。参義を経て、寛治五(一〇九一)年権中納言、左兵衛督や右衛門督をも兼任した。薨去は承徳二年十一月、享年四十三歳、飲水病によるという。

前述のように、承徳元年に大宰権帥となつた匡房は、翌年の九月、即ち基忠薨去の二カ月前に赴任したので、当該贈答歌は筑紫と京の間で交わされたものであろう。なお、匡房の一七九番歌は次のように『千載集』に採られている。

右衛門督基忠かくれ侍りてのち、彼家につかはしける

前中納言匡房

花とみし人はほどなくちりにけりわがみも風をまつとしらなん
(哀傷・五七〇)

10、資成朝臣(橘資成)、下野守義綱(源義綱)

資成朝臣むすめをあひいどむあひだ、しもつけのかみ

つかはしける

前中納言匡房

匡房は頼綱の後半生の歌合行事で同席することも多かったもので、師光同様に親交があつたのであろう。頼綱に歌を贈らうとしたが、その卒去の為に果たせなかつたという詞書内容から、詠作年次は頼綱出家の永長元年か、その翌年、頼綱卒去の承徳元年であらう。承徳元年であれば、匡房はその三月に大宰権帥に任じられる。

当該歌は他出が多く、『新古今』に入集したほか、『続詞花集』(雑上 七八五)、『別本和漢兼作集』(七八)、『歌枕名寄』(四五〇四)に見られる。

(新古今・雑上 一五七一)

この『新古今』では頼綱の生前に贈つたような詞書になっており、他集もこれに従うが、『続詞花』だけは詞書に「頼綱朝臣つのくにのはつかといふ所に侍る時、やらんとてよめりける」

よしつなにあひぬとききて

けぶりたつ室の八島にあらぬ身はこがれしことぞくやしかりける (一九三)

橘資成(生没年未詳)は、橘義通男、7の為仲の同母弟。その関歴は同時代の源資成と紛らわしいが、後朱雀天皇の長久元(一〇四〇)年に、正六位上藏人で、同二年には左衛門尉を兼ねた。また、康平三(一〇六〇)年遠江守か。従五位上大和守。応徳三(一〇八六)年出家、大和入道と号した。子女に、後三条院皇子実仁親王の乳母がいる。『後拾遺集』(夏・一八七)に一首入集。

下野守義綱は源義綱(生没年未詳)。清和源氏、頼義の二男で、義家の弟。承暦元(一〇七七)年に下野守、寛治七(一一〇九三)年に陸奥守、嘉保二(一一〇九五)年に美濃守、いずれも兄義家の後任となっている。後に源氏一族の内紛の中で追討を受け、佐渡へ流され、最期は自害した。

さて、当該歌は、橘資成の娘に、匡房が他の男たちと競って言い寄ったものの、資成女が下野守義綱と逢ったと聞いて、悔しい思いを詠んだものであろう。「下野守義綱」という呼称からは、承暦元(一〇七七)年以降、寛治六(一一〇九二)年の間のことであろうか。詞書の前半部がやや紛らわしく、一見、資成も女に言い寄った一人のようにも受け取れる(『新編私家集大成』では「資成朝臣、むすめ」と読点を付している)が、それでは「あひいどむ」「ききて」の主語が資成となってしまう。年齢の点でも、資成は明らかに匡房より上の世代であるが、義

綱は(兄義家の生年から推測して)匡房と同世代である。また、『新拾遺集』には次のように採られている。

すけしげが女をいひわたりけるに下野守よしつなにあひぬとききていひつかはしける 前中納言匡房
煙たつ室のやしにあらぬ身はこがれしことぞくやしかりける (恋二、一〇八九)

11、高房朝臣(源高房)

高房朝臣女契間、彼朝臣卒、其後送件女許

きえぬべき露の命はなき人のちぎりし言の葉にぞかかれる

(一九九)

源高房(生年未詳一〇七七)は、醍醐源氏、但馬守行任男。母は中納言藤原懷平女。摂関家の家司の一人。大江定経女との間に高実(師実・師通・忠実に家司として仕えた人物)を儲けた。永承二(一一〇四七)年に加賀守、同六年に皇后宮(寛子)大進(『栄花物語』)、以後、但馬守、宮内卿、治暦四(一一〇六八)年には丹波守、その後卒するまで再び但馬守。極位は正四位上。邸宅(大炊御門大路南、万里小路東)は大炊御門第と呼ばれ、師実室麗子が師通出産時の産所となったこと等が史料に見える。

当該歌は、高房の卒後の詠と知られるので、詠作年次は承暦元年九月以降、あまり時を隔てない時期と思われる。詞書から、匡房は生前の高房に彼の娘との結婚を申し入れ、約束をとりつけていたことが知られ、「私はあなたの亡き父上の言葉を頼りにしている」と娘に訴えた歌と解される。

12、孝定朝臣(未詳)

孝定朝臣むすめのもとにつかはす、たちまの君

引く人はあまたありともあやめ草我よりほかの人にね見すな (二〇二)

当該歌は、匡房が女に、「多くの男から誘いがあるうとも自分以外とは深い仲にはなるな」と言い贈ったもの。菖蒲を引き合に出していることから、端午の節の頃であろうが、本気の恋歌とも、根合などの折の廷臣と女房の戯れ事とも考えられる。

歌そのものは明解でも、詞書には不明な点がある。10・11で取り上げた歌の場合にも共通するが、この集の恋の部(一八六番以降)の詞書では、「(人名) + 女」で「(人名)の女」の意を示す。また、一八六番のみ殿上歌合の恋題の詠で、一八七番以下、女へ贈った歌が二九三番まで続く。一部は代作歌で、その場合は「かはりて」等と示す。贈った相手の名が示される場合とそうでない場合とがあるが、名を示すのは「(人名) + 女」か、女房名である。当該歌では、「孝定朝臣むすめ」は「孝定朝臣の娘」の意で、「代作」との表現もないので、「孝定朝臣むすめ」は「たちまの君」と同一人物かと思われる。

さて、「孝定」は、漢字表記されているので、『尊卑分脈』で調査すると、「藤原孝定」が見出される。しかし、その藤原孝定は十二世紀半ばの有名な雅楽家であり、藤原孝博(惟孝説孝孫。「琵琶藤三」と称された)の子とも、関白師通孫・成隆と孝博女との間に生まれて外祖父の家を嗣いだとも言われる人物である。明らかに匡房よりも後代の人物で、ここに言う「孝定朝臣」ではない。ただ、この「藤原孝定」が、『分脈』の注に

よれば本名が「孝忠」であるというので、当該歌の「孝定」も同じ可能性があるかと「孝忠」を検討してみた。すると、円融朝の藏人で一条朝期に山城守・伊勢守を勤めた藤原孝忠(魚名公孫、永頼男)と、長保二(一一〇〇)年に前因幡守で卒去した藤原孝忠(宇合卿孫、斯生男)がいたものの、やはり匡房が官人として活動した時期には適合しない(他の「孝忠」は、いずれも平安末期以降の人物)。

念の為に字を変えて「高定」を検討したところ、藤原定輔男の高定(母は源頼国女)には、匡房が官人であった時期に適合する可能性がある。父の定輔は高藤流説孝男で、『分脈』に国司の経歴が多く注され、長暦元(一一〇三七)年六月播磨守在任中に卒去している。この定輔の名は『御堂関白記』『小右記』に度々見えており、摂関家の家司であったと考えられる。高定のほうは、『分脈』に「蔵」「阿波守 従四位下」とあり、後一条天皇の長元五(一一〇三二)年正月六位藏人に任じられ、大膳亮と兼任したことが確認できる。その後については明確ではないが、史料には長久元(一一〇四〇)年正月に丹後守となった(姓欠)高定がおり(『春記』、この(姓欠)高定は、永承三(一一〇四八)年にも丹波(丹後の誤りの可能性が高い)前守(『春記』)として見える。

また、「但馬君」のほうから検討してみると、「但馬」はどの時期にもいってよい女房名である。匡房の時代の女房では、『分脈』から郁芳門院女房「但馬」(源行任女、従五位下肥後守雅経母。11の高房の姉妹にあたる)が知られるものの、この郁芳門院但馬では、詞書前半の内容とは適合しない。

よって現時点では「孝定朝臣」は未詳とするほかない。

13、もときよの朝臣（源基清か）

もときよの朝臣に履をはきかへられて、返しやるとて立ち去ればなみにまかせてあちなくそのみくつをかけてけるかな

かへし

かけてけるかたをば知らで玉もくつ求むるかたは異にぞありける
(三〇五く六)

匡房が基清に履をはき替えられたので、「立ち去れば……」（仕方なく残っていた履をはいて帰宅したの意）の歌を付けて返してやり、基清が「かけてける……」（はき間違いに気づかなかつたことだの意）と返歌してきたもの。

匡房の官人時代に適合する「もときよ」としては、次の二人が挙げられる。

①源基清。醍醐源氏、従五位下伯耆守定成男、母は平理義女。

生年未詳ながら、『分脈』により応徳三（一〇八六）年十月十一日に卒去したことが知られる。承暦三（一〇七九）年に遠江守となるも、同四年五月、太神宮神田を刈り取った件で訴えられ、陣定を経て、永保二（一〇八二）年十一月に罷免された。また、この間に、基清の罪名に関する勘文に誤謬のことがあり、明法博士らを左中弁匡房が取り調べている。『帥記』『水左記』『百鍊抄』による（6）

②高階基清。生没年未詳。美濃守正四位下業敏男。兄弟に『金葉集』歌人となった経成（常陸介筑前守正四位下）、子に肥後

守従五位上基実（任肥後守は承徳元（一〇九七）年）がおり、基実の女子は掌侍となっている（堀河院内侍肥後）。祖父の業遠や叔父にあたる成章の生没年等から推定して、匡房の官人時代の前半期と時期的に重なる人物であると考えられるが、基清自身の経歴は『分脈』に注がなく、補任類にも現時点では名を見出せない。或いは早世したのであろうか。

以上の二人の「基清」のうち、どちらが贈答の相手であるのか、また、当該贈答の詠作年次の推定も、ともに手掛かりに乏しい。敢えて言うならば、この贈答の前（三〇四番歌）が蔵人になった折（治暦四（一〇六八）年）の述懐であり、贈答の後（三〇七番歌）が次の14で扱う美作守在任時（承保元（一〇七四）年）のものである。その二つの間にある当該贈答は、蔵人在任の延久年間頃のことである可能性はある。ここではその時期に生存が確かな源基清と考えておくことにする。

14、源縁法師

美作の守にて侍りしほどに、源縁法師、西国へまかる
とて、かてなどこふに、つかはすとて

風はやみ八重の潮ぢにこぎいづとさてやまみねばすぎかてにせよ
(三〇七)

源縁法師は、比叡山延暦寺の僧、阿闍梨。生没年未詳。正五位下藤原邦任（国任）男。越後に住んだという。延久四（一〇七二）年三月「能登守通宗氣多宮歌合」、承保三（一〇七六）年十一月「前右衛門佐経仲歌合」、永保二（一〇八二）年五月「前出雲守経仲家歌合」に出詠。『後拾遺集』に三首、『金葉集』

に二首、入集。『長秋記』天永二（一一一一）年五月二十一日条に延暦寺僧「源縁」の名が見えるが、これと同一人物であるとする、匡房と概ね同世代の人物であろう。

匡房の美作守任官は延久六（承保元 一〇七四）年正月、下向は、一六九番詞書に「七月に美作へくだるとて」とあることから同年七月となる。源縁の訪問、すなわち当該歌の詠作時期は、匡房が在国した延久六年秋から承暦元（一〇七七）年末頃まで期間のうち、源縁が承保三年十一月の「経仲歌合」に参加していることを考慮すると、承保元々二年の間であろうか。ただ、源縁がどうして匡房に旅の糧を請うような関係であるのかは未詳。或いは5の通宗を介して交流があったものか。

15、すみよしの神主国基（津守国基）

後三条院におくれたてまつれる年のつごもりに、住吉の神主国基

春にあはんことはちかしと思へどもくれゆく年のをしくもあるかな

かへし

藤衣ぬぎもやするとをしければ年のかへらんこともほになく
(三〇八く九)

津守国基（一〇二六く一一〇二）は、住吉大社三十九代神主（康平三（一〇六〇）年就任）。後三条院をはじめ四条宮寛子、関白師実らの住吉参詣に奉仕した。また、白河院近臣の藤原顕季をはじめ、歌人として当代一流の人々や廷臣らと交流を持つた。『後拾遺』に三首入集。康平六（一〇六三）年「丹後守公

基歌合」、延久四（一〇七二）年「能登守通宗氣多宮歌合」、寛治五（一〇九一）年「従三位親子草子合」、同六（一〇九二）年「頭中将宗通歌合」などにも出詠した。
この贈答は前稿でも取り上げたが、延久五（一〇七三）年十二月の詠作。14で取り上げた源縁法師への歌よりも一、二年早い時期のものである。この贈答の次（三一〇番歌）には、白河院の春宮時代の歌があることから、雑の部のこのあたりには、厳密な編年配列ではないものの、近い時期の歌を配しているように思われる。

以上、『江帥集』前半部（三七四番まで）に見える廷臣・僧ら十六名について検討し、詠作年次を考察した。前稿で整理した天皇家・摂関家の人物を含めても、前半部に見える人物は、白河院と生没年未詳の人物を除けば、いずれも康和四（一一〇二）年までに死没した人物である。傾向として、所謂「和歌六人党」とその周辺人物、匡房の官人としての前半期の人物が目につく。そして堀河天皇と天皇側近の歌人たちは登場しない。従ってそれらの人物に関わる歌の詠作年次も、康和三（一一〇一）年頃までである。このことは、承暦二（一〇七八）年四月の「内裏歌合」や寛治八（嘉保元 一〇九四）年の「高陽院七番歌合」等の歌は含みながらも、『堀河百首』の歌が無い（7）事実とも符合する。すなわち『江帥集』前半部は、康和三年までの歌を資料に自撰したものではないか。もし、そうであるとすると、家集自撰の契機として、康和の頃に堀河天皇による家集収集の動きがあったこと（8）が注目される。ただ、こ

れは集の読解をもう少し進めた後に、改めて考察すべき問題であろう。

なお、前半部には、女房の名も十人（本稿12で挙げた「但馬の君」を含めた数。その内の半数は四条宮寛子の女房）ほど見えるが、それらの人物と関連歌については、次稿で整理・検討したい。

注

- 1、有吉保『江帥集』解題（『私家集大成 中古II』明治書院 一九七五年）、及び「同」（『新編 私家集大成CD』エムワイ企画）。
- 2、拙稿『江帥集』後半部に関する二、三の考察―『大式集』作者と匡房、「三位殿」と匡房―（『都留文科大学研究紀要』第八二集 二〇一五年十月）
- 3、拙稿『江帥集』前半部について―登場人物と詠作年次の考察（1）―（『瞿麦』第三十号 記念号 日本女子大学文学部日本文学科 瞿麦会 二〇一六年三月）
- 4、冷泉家時雨亭叢書 第十八巻『平安私家集 五』（朝日新聞社 一九九七年）所収『江帥集』による。
- 5、「大納言経信集」（冷泉家時雨亭叢書『平安私家集 十二』所収）一七六番歌詞書。また、「経信卿集」（冷泉家時雨亭叢書『平安私家集 十』所収）の一五三番歌詞書でも「永保二年冬十月」とある。
- 6、『水左記』承暦四年五月七日・同八日・十月十九日、永保元年八月廿八日・九月八日。『帥記』承暦四年五月八日、永

保元年八月廿四日。（以上『増補 史料大成』による）『百鍊抄』永保二年七月十五日、十一月廿二日（東京大学史料編纂所検索データベースによる）。

7、厳密には、『堀河百首』歌のうち四首が『江帥集』にも存する。具体的には、一〇番、八〇番、九七番、二三九番。これらは既に先行研究において言及されている。橋本不美男・滝澤貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』は、旧詠を『堀河百首』に入れた、という見解を示し、竹下豊「晴の家 集―堀河百首歌人の家集を中心に―」（和歌文学論集4『王朝私家集の成立と展開』一九九二年 風間書房 所収）は、別の場で詠まれた歌が後に『堀河百首』の中に入れられた可能性に言及しつつも、家集に『堀河百首』から一首も採っていないと見ることは疑問を呈する。

8、令子内親王（堀河天皇の姉）に仕えた女房の家集『大式集』の一八五番詞書に、「うちに人人の集めししに、参らすべきよし、一宮の紀伊の君のがり申すに……」とあり、これは『大式集』成立（長治二年頃）の一〇二年前、即ち康和年間のことと考えられる。『基俊集』にも一〇六番歌左注に「これは、堀河の院の御時、集めししかばまいらせし……」とある。

本稿は「平安文学の会」平成二十七年八月例会（八月二十九日 於・武蔵野大学三鷹サテライト教室）における発表内容に、後日の検討・補足を加えて論文化したものである。発表の場でご教示下さった諸先生方に深く御礼申し上げます。